



TITLE:

# <大會抄録>東魏北齊革命と『魏書』の編纂

AUTHOR(S):

佐川, 英治

---

CITATION:

佐川, 英治. <大會抄録>東魏北齊革命と『魏書』の編纂. 東洋史研究  
2003, 62(3): 503-504

ISSUE DATE:

2003-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155530>

RIGHT:

## 大會抄錄

### 清代官僚制下における考成と挪移の關係

小野達哉

清代の地方では、税糧の徴收・上供にからんで、大きな社會問題が引き起こされていった。この報告では、考成（案件を期限どおりに處理できたのか否かによつて官僚に賞罰を課す制度）・挪移（税糧の項目の付け替え）について、こうした問題の背景となる状況や、これら考成と挪移の關係を取り上げることについて。

考成が税糧徴收へ順次適用されてゆくのにともない、州縣は税糧全額の徴收を義務付けられた上に、不足を出した場合には、革職・降格を含む厳しい處分を課せられるようになった。さらに、州縣では、その年度の徴收額（經徵）のみならず、それ以前の年度の未徴額の徴收（帶徵）まで義務付けられたため、知縣は過重な徴税義務の負擔に苦しめられることになったのだという。しかしそのいっぽうで、こうした考成の強化に表裏する動きとして指摘しなければならぬのが、挪移の盛行である。これは、税糧項目の付け替えによつて、知縣が處分を課せられるのを免れようとしたもので、考成の實效性を低下させる働きをなすものだと、まず指摘することは可能だろう。しかし、制度の運用面に即してみると、考成と挪移の關係は、こうした指摘だけで十分に捉えき

れるといえるだろうか。

この報告では、考成・挪移のあり方をめぐる規定や論議、さらに雍正時代の奏銷冊の分析を踏まえ、主に制度運用の側面から、考成と挪移の關係を、清代官僚制の運用構造の中に位置づけることを目指してゆきたい。

### 東魏北齊革命と『魏書』の編纂

佐川英治

『魏書』は東魏北齊革命の翌年に文宣帝高洋の敕命で魏收が編纂した「正史」であるが、上奏の直後から「穢史」の非難を浴びたことでよく知られており、『魏書』の研究も「穢史」の眞偽をめぐる問題を中心におこなわれてきた。しかし『魏書』本来の目的からすれば、穢史問題はむしろ枝葉の部分に發生した問題で、北魏史の正史としての最も重要な役割は、孝文帝の漢化政策を武斷政治から文治政治への轉換點と位置づけ、そのもとの胡漢對立の解消を最大限の評価とともに描き出すことにあったと考える。その目的はいずれも魏齊革命と深く絡んでおり、第一に、元氏から渤海高氏、すなわち胡から漢への政權委譲であつた魏齊革命を正當化すること。第二に、西魏との正統性をめぐる争いにおいて北齊の正統性を主張すること。第三に、高氏への權力集中を促す山東士族が漢文化の正しい繼承者として政治の主導權を確保し、高氏の權力集中に批判的な國內の「勳貴」勢力を抑え込むことが

あった。

北魏分裂後の社會にしばしばみられる胡漢の激しい對立は、必ずしも種族問題とはかわらない分裂後の様々な對立が、しだいに胡漢の文化的な對立として塗り分けられていったことによるものであり、北魏史の基本史料である『魏書』も、そうした對立を背景に書かれたものである。

## 唐代視朝制度考

### 松本保宣

唐王朝の政策決定の場の一つに、皇帝自ら主宰する御前會議が挙げられる。普通聯想されるのは、朝廷に大事あつて臨時に召集される會議であるが、唐王朝の場合、恒常的に舉行される御前會議が制度として存在し、日常的な政策決定の場として定着していた。むしろこちらの方が遙かに重要である。これこそ朝會儀禮の一環として行われた視朝（聽政）に他ならない。その様態は概ね二系統に分かれる。一つは常朝儀禮に伴い正殿で舉行される奏事であり、もうひとつは正殿以外の宮殿で行われる便殿議政である。前者が場所・参加者・日時が規定された定例の御前會議であるならば、後者は、臨時に任意の参加者を指定できる柔軟な制度であった。具體的な場として、正殿は唐初、兩儀殿であり、その後紫宸殿に定着し、便殿は、宮城の任意の殿から次第に大明宮の延英殿に固定していく。正殿常朝について、「入閣」なる儀禮の存在

と共にその實態が古來議論の的であつたが、概ね前述の如く紫宸殿が中心とみてよい。唐後期では便殿延英殿の議政が、その機能の柔軟性もあつて視朝の中心を占めつつあつたが、九世紀中葉の文宗の改革により紫宸殿が再活性化され、紫宸・延英兩殿の機能が共通化される。御前會議は口頭でなされるが、その議決事項は文書行政にリンクしており、又、宰相主導の案件も皇帝が聽政の場で修整可能で、それがある程度制度化されていた。實質的に王朝最高レベルの政策決定の場と評價されよう。

### チンギス・ハーン廟の起源

### 白石典之

チンギス・ハーン廟（成吉思汗陵）は現在中國内蒙古にある。そこはモンゴル民族の精神的據り所であると同時に、古式に則った祭儀を残していることから、モンゴル文化の研究においても重要な場所となっている。内蒙古にチンギス・ハーン廟の存在が史料で確認できるのは、遅くとも一六世紀初頭といわれている。その源流はチンギスの墓前に設けられた祖宗の靈廟「八白室」にあるといわれ、漠北の地にあつたとされるが、具體的な場所や構造はわかっていなかった。

報告者はモンゴル國アウラガ遺跡で考古學的調査を行い、そこがチンギスの本據地「ヘルレンの大オールド」址であることを確定し、宮殿址とともに、それを改造した特殊な建物址を発見した。